

tonalestate

6-8 AGOSTO 2019, PASSO DEL TONALE (BS-TN) - PONTE DI LEGNO (BS)

GLI UOMINI NUOVI

Hombres nuevos (単数ではなく複数の「新しい人間たち」)は、この20年の歴史を祝い、考察するためにTonalestateが提案したテーマです。2000年夏、ジョヴァンニ・リヴァ師はトナーレスターテの文化的体験を始めました。この経験は、毎年、世界中から集まる多くの知識人、学生、老若男女による献身と働きによって歩んできました。Tonalestateは彼らと共に判断の道具を築き、何よりも社会の変革が可能な存在として必要であり、むしろ不可欠な関係として揺るぎない持続性を提供してきました。

20年前、仮想ツールが今ほど決定的ではなく、今日とは異なる世界でした。あの時代は互いに顔を見て話し、また議論することが普通でした。今日、他人との関係において会話は遠くからの言葉になり、一連の写真やメッセージを交換することになってしまいました(そして、往々にして画像とメッセージを読むために1日を過ごしてしまいます)。したがって、今では人と会うために努力が必要になっていくことに気づいています。バーチャルリアリティーから切り離される犠牲が必然になるからです。しかしながら、互いに人と会い、話し、分かち合い、そばにいる人の甘い香りを味わう大切さと同時に、突然の気分の変化と共に時間が過ぎ去ってしまう顔を味わうことも必要不可欠です。そばにいる人が突然いなくなることもあるのです。どれほど繊細に他者に近づくのか。人生の儚さを意識すれば、記憶となってしまう抱擁の内に、相手をそばに止めおきたいかのように、神聖な尊敬の念で他者を尊重する必要があります。それは一時的ですが、私たちが永遠にする必要があります。

戦争から平和への転換は、あらゆる方法で他の人々のそばに立つという犠牲が必要です。他者の性質、問題、喜びを余すところなく味わうためです。時には面倒で、気がかりで、心揺るがせるのですが、おそらく言葉がなくとも関係を保つのです。戦争から平和に転換するためにこれが不可欠なのです。この言葉は、多くの地域における戦争(武器の有無にかかわらず)だけでなく、私たちの孤独や不安、苦悶によって引き起こされた戦争も示しています。それらは、時々爆弾がさく裂するように大虐殺に導く爆発をします。そして平和という言葉は、爆弾や武器がない共存だけでなく、私たちの前にある、そしてこれから続くこの地球上での旅(私たちがここに存在したことはおそらく、ただの記憶に留まるでしょう)を共に分かち合いながら、泣いている人と共に泣き、喜んでいる人々と共に喜べる平和を表しています。

私たちは黙示録的なテキスト(in die irae; 怒りの日に)を読むとき、永遠の苦しみ、火と炎の審判に終わる悲痛で不幸な予感として理解することがあるでしょう。しかしそれは天使たちと共に歩むという提案なのです(天使とは新しい人たちを差し、彼らは根本的に新しくなり急進的で完全に新しい何かを告げるため、天使と呼ばれます)。彼らと共に高いところに行く提案です。これによって平和を恐れることなく味わうことができます。その平和は、私たちの多くの恐れだけではなく、喧嘩といういい加減さからも解放してくれます。これらの文章は、常に逃げる、あるいは人を非難してしまう不幸な翼から解放され、自由な人間にふさわしい生き方を示唆しています。できるなら、これらの黙示録的なテキストを読む時間を作りましょう-ヨハネ、エノク、またはアルダ・ビラフの本まで。彼らは非難ではなく、解放と平和を生む赦しを教えてください。

常に支配的なメンタリティーに代わる深い文化的な源であるTonalestate。この忍耐強いTonalestateは、決して冷やかになることなく、気を取られることなく、無関心ではありません。いつも人間に注意を払い、経済的な苦境にもつまづかないこのTonalestateは、根気強く平和の場所を提案し続けます。つまり、支配的なメンタリティーに抵抗する島と言えます。スペインの歌にあるように、共に歩くことによってだけhombres nuevosの経験をし、新しい人間性を構築することができるのです。この歌は愛することができる大きな心、戦うことができる強い心を求める祈りです。そしてここでも複数形が使われています。実際、共になってこそ、初めて「新しい」のです。そしてこれは私たちの時代が立ち上がる本当の「大きな挑戦」です。

Tonalestate ポスター

in die irae 怒りの時代の
hombres nuevos 新しい人間

新しい創造が必要だが
世はそれを「スキャンダル」と叫ぶ。
世はこの新しい人間を指さし、
そして片隅に隔離する。
それより恐ろしいのは地獄だけだ。
ジョヴァンニ・リヴァ
『私の名前はジョヴァンニ』より